

三好伝記

ちはノ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三好義興と戦極姫の二次創作です。

注 戦極姫はプレイしたことありません（キャラ崩壊注意）

ガバガバ歴史知識

史実年表や史実の無視

目次

第一話	義興	1
第二話	彈正	10
第三話	左近	18
第四話	主税	25

第一話 義興

京、かつての繁栄は失われ所々に戦乱の影響がみられる。

その京の中でも將軍足利義輝の政務を行う御所の控室に二人の男女がいる。

「義興、あまり緊張しなくてもいいのだぞ、適度に力を抜きなさい」
そう、隣の男に問いかけるのは、ショートカットで艶のある綺麗な黒髪を持つ女性で、現三好家の当主である三好長慶である。

「はい、申し訳ありません、姉上」

それに答えるのは、姉ゆずりの黒髪と整った顔の男で、三好家の長男でもある三好義興である。

私、三好義興は三好元長の嫡男として生まれたが、この三好義興以外に26年間の平成日本においての記憶がある。この世界に来てからもかなり立つが……自分の記憶が正しければ、姉上こと三好長慶は女ではなく男であるはずだ、それだけでなく私自身も三好長慶の弟ではなく息子なはず。

姉上の顔を見ながらそのようなことを考えていると、その視線に気づいたのか問いかけてくる。

「どうかしたの、義興」

「いえ、なんでもありません、姉上」

その後も姉上とたわいのない会話を続けていると、ふすまを開け一人の男が入ってくる。

「三好殿準備が出来たので案内いたします」

「これは細川殿、よろしくお願いいたします」

「二回の者面をあげなさい」

謁見の間に凜とした声が響く。

顔をあげると金髪の女性が目に入る。

（これが聖劍將軍……）

彼女こそ室町幕府第13代將軍足利義輝である。いかに女性となろうとも醸し出すその覇気は本物だ。

「三好殿よく来たな、して要件は」

「はっ、此度は弟の挨拶にと」

「初めておめもじいたし申します、三好孫次郎義興と申します」
そういつて平伏する。すると、公方様から声をかけられる。

「わらわが義輝じゃ、よろしく頼むぞ」

「ははっ」

「して、義興は……」

「では公方様私たちはこれにて」

「うむ、また来るがよい」

御所を出た後京の街を二人で歩いている。京の街は所々廃家が目立つ、京の街が戦乱に巻き込まれるたび復興を繰り返してきたが、昔の繁栄には届かない。とはいえ義興が、京に来た時に比べれば復興したといえる。

二人で歩いていると大きめの屋敷が見えてくる。上京に構えられたこの屋敷は、三好家が京の街での活動拠点としている拠点であり、それなりの数の人が詰めている。また、屋敷全体を大きめの壁で囲まれておりある程度の防衛機能が備わっている、屋敷の敷地内には、御殿空間だけでなく家臣の屋敷内における一時的な住まいである武家長屋や政務室、厩舎なども備えている。そんな屋敷に帰って来ると、門の前に女が一人立っている。松永弾正久秀だ、彼女の経歴についてはよくわかっていないが、三好長慶率いる三好家が四国より近内に上陸した際に、優秀さを買われ弟である長頼と共に仕官している。また、三好家内では重臣であり、滝山城主でもある。

「あら、御屋形様、義興様今お帰りですか」

「ああ、久秀今帰ったところだ」

姉上が答える。

「そうだ久秀、一刻ほどしたら前に言っていた評定をするつもりだ、屋敷に集めるものを集めておいてくれ」

「御意にございます」

姉上はそういうと屋敷の敷地内へと入っていく。

「義興様、私達も参りましょうか」

「そうだな」

そんな姉上の後を久秀と共に追いかけて、屋敷の敷地内へと入っていく。

「評定を始める」

姉上の号令に合わせてこの評定にいる家臣一同が、平伏する。

頭を上げるとともにこの評定に参加している者の顔をぐるりと見渡す。この評定に参加しているものはそう多くはない、前から予定されていた評定とはいえ四国勢や他に任務がありこの地を離れているものはいない、いるのは近内にて活動を行っている者がほとんどだ。

「皆も知っていると思うが、今回の評定は大和についてだ、私は大和への遠征を考えている、表向きの理由としては河内勢力の残党狩りだが……」

「興福寺ですね、姉上」

「ああ、その通りだ」

興福寺は、現在の奈良県奈良市登大路町にある寺院であるが、室町時代を迎えた頃には強力な僧兵や武士を有しておりその勢力範囲は大和一国にも及んでおり、実質的な大和の支配者である勢力である。現在この興福寺と三好家は敵対関係にある、三好家が細川晴元との戦いで近内に上陸した際には、何度か横槍を入れてきただけでなく、三好家が細川晴元を追い出したあとも、河内、大和間での国境にて何度か小競り合いも起きている。その事も年々と関係は悪化している。

「今回の大和侵攻だが、公方様にはすでに話を通している」

「今の幕府にとっても興福寺は頭痛の種でしたからね、良い機会と考えたのでしよう」

実際に幕府は興福寺により大和に守護を置くことが出来ないでいた、興福寺を疎ましく思っていることは間違いないだろう。將軍権威の復興を目指している將軍義輝としても間接的とはいえ大和に対して影響力を持つことができ悪い話ではない。とはいえ興福寺の一

乗院は、義輝の妹君である慶覚が門主をしており、表向きには將軍家及び幕府はこの件に一切関与していないものとし、慶覚様に一切の危害が及ばないという条件の下でだが。

「ああ、そうだろうか」

長慶も同意する。

「それと、今回の遠征だが総大将は義興、寄騎として久秀らをつける」

「御意」

「御意にございます」

二人で頭を下げる。

「遠征は田植えが終わり次第行うつもりだ、また、遠征に関してはすべて義興に一任する」

その後も幾つかの案件の話し合いや決定がなされ、評定はお開きとなり、姉上が退出すると皆それぞれの職務へと戻っていく。その中一人の女性に声をかける。

「久秀少しいいか」

自分の声を聞き振り返り答える。

「もちろんです、義興様」

「大和の件について話し合いたい、どこか時間はあいてないだろうか」

そう聞くと、久秀は少し考え込んだ後答える。

「夕刻時になったら政務も終わりますし、よければ私の屋敷に来てください、迎えの人も出します」

「ああ、わかったよ夕刻にまた」

そう言う与会釈をし政務へと戻っていく。

夕刻となり日も落ちかけているなか、自室にて久秀との会談のための準備をしていると人が障子の向こうで座り、声をかけてくる。

「義興様、久秀様の使いで参りました、楠木正虎です、お向かいに上がりました」

その声を聞き荷物をまとめ障子をあけて廊下へと出ると、長い黒髪

を後ろで縛った女性がいた。彼女、楠木正虎は久秀の右筆で面識もる。また、以前彼女から楠木正成の朝敵の赦免をしてほしいという嘆願を受け、久秀とともに正親町天皇陛下にとりなしてもらって以来の仲でもある。

「では、行くとしよう、正虎」

「御意、義興様お荷物を」

「いや、大丈夫だ」

松永久秀は京都での政務を任されている事もあり、他の家臣達とは違い上京の別のところに屋敷を構えており、移動しなければならぬ。

先導する正虎の後ろ姿を見ながら着いていくと正虎が思い立ったように話しかけてくる。

「義興、正成殿の件、何とお礼申せばよいか……」

こちらを伺うような顔で言う。

「なに、礼には及ばんよ、私のしたことと言えば朝廷と久秀との橋渡しをしたぐらいさ」

義興は、教養人として名高い姉、長慶や茶人でもある弟、義賢の影響を受けており、在京中は姉長慶に変わり公家や朝廷と関わる仕事をしてきた事もあり、公家や朝廷とも面識があり。公家からの評判も良い。

「いえ、義興様がいなければ、あれほど素早く話がまとまり実現することは、あり得なかったでしょう」

「なに、そんなに気にすることはないよ正虎」

「このご恩いつか必ずや」

そんなやり取りをしていると松永家が利用している武家長屋へと着く。すると久秀が長屋から出てくる。

「お待ちしておりました、義興様、正虎案内ありがとう、下がりますい」

「御意」

「では、義興様お部屋に」

二人で久秀の部屋に入る。部屋の中は3月の夕刻ということもあ

り少し肌寒い。

「して、早速だが本題に入りたい、今回の遠征についてだが、これを見てほしい」

手に持っていた 大きめの紙を広げる。紙は河内・大和国境付近の大まかな砦や城が描かれており、義興配下の乱破を使って製作した絵図である。その絵図に載っている河内・大和国境の大和側にある信貴山に描かれている信貴山城を指さしながら言う。

「大和遠征にあたりこの城を利用したいと思う」

「信貴山城、ですか……確かこの城は何年か前に廃城になったと記憶していますが……」

「ああ、その通りだ、そこで、この城を改修しここを大和遠征の活動拠点として使おうと考えているが久秀どう思う」

「良い案かと、ただそこを使うとなると興福寺側も黙ってはいないかと」

「その件に関しては既に姉上に相談済みで、姉上の方で調整してくれるとのことだ」

信貴山は、河内・大和国境の間に横たわっており、交通の要所でもある。この位置ならば河内・大和の両方ににらみを利かすことが出来るだろう。それに、改修ならば築城するより、時間もかからないだろう。

「では、義興様大工達や必要なもの用意は私がいたします、準備ができ次第現場へと向かわせます」

「よろしく頼む」

その後も久秀といくつかの案件をまとめたところで、侍女が夕刻時間であることを知らせに来る。

久秀と共に広間に行くと、正虎ら久秀の直臣が何人かいる。彼らの脇を通り最も上座に用意された席へとすわる。久秀はすぐ右下へと座る。

久秀が座るのを確認してから箸をとる。

「遅れてすまない、食べるとしよう」

素晴らしい料理に箸をつけると、久秀の家臣達も料理を食べ始める。

久秀の家臣達と談笑しながら食事を楽しんでいると久秀がお酒を持って近づいてくる。

「義興様、今日の料理どうですか」

「美味しいよ、特にこの鯛がうまい、旬なだけあるよ」

「良かったです、その鯛は大阪湾で水揚げされたものなんです」

「そう言いながら、私の空いた杯にお酒を注ぐ。」

「そうだ、今日はもう遅いですしうちに泊まっていってください」

「ああ、確かにそうだな、今日は世話になる」

そう返すと、久秀は軽く微笑む。

永禄2年6月 信貴山城

阿波より4000の軍勢を率いて堺へと上陸したのち松永久秀及び摂津衆と合流し、11000の軍勢にて河内を経由して大和へと入り今でも改築がされている信貴山城へと入城する。

信貴山城では、今でも大工達が忙しそうに動き回っている。この信貴山城は、久秀と共に改築の図面を引いたもので、本丸の四方に櫓と長屋のくつついた建物が建てられており御殿の近くには4層の大型な櫓が建てられている。

せわしなく動きまわる大工達をぼうっと見ていると、青色のシヨートカットの髪をし片眼鏡をした三好長逸が視界に入ったため声をかける。

「長逸」

「これは、義興様」

「このような場所でどうしたのだ」

「いえ、この城は従来の物とは違う構成になっているので、興味がそそられました」

「ああ、この城は久秀と計画したものでな」

「この城は良い城になりますよ」

そう言う長逸の顔はどこか嬉しそうだ。

「そういつてくれると嬉しいよ」

この城を計画するにあたり自身の中にある平成の記憶を利用して
いる。櫓と長屋の合成は旅行で行った際にみた金沢城や彦根城から
発想を受けており、御殿の近くに建てられている四層櫓は天守閣や天
守櫓からきているが、これに関しては久秀も同じような事を考えてい
てらしい。また、最初は、本丸の四層櫓だけの予定であったが、久秀
といろいろと話し合う内に盛り上がり、ここまで大きくなってしまっ
た。そのため、初期の計画より工事が大分遅れが出ているが必要経費
だろう。

「この城が完成すれば、大和への打ち込まれた楔になる、本来ならあ
る程度落ち着いてから行動するつもりだったが……敵は待つてはく
れないがな」

「興福寺としてもこちらの体制が整う前に切り崩してしまいたいの
でしょう」

「そのつもりだろう、戦を長引かせてもよいことはないからね」

間者達に集めさせた情報では、興福寺は大和国内の傘下に入ってい
る寺社勢力や武士達国人衆を招集しており、すでに本寺のある山辺郡
に6000あまりが集まっている。自身の僧兵を含めればもっと増
えるだろう。

集まった勢力としては、筒井、十市、古市などをはじめ大和の有力
国人衆達である。

「まあ、こちらとしても黙ってみてるつもりはないがな」

単純な兵力差だけで見るとならば、三好勢は興福寺の二倍近くの兵力
をこの大和遠征に投入している。とはいえ、大和は興福寺の勢力圏
だ、地の利は興福寺にある。そこで、久秀を中心に大和に対して工作
を始めている。

「念には念をですな」

「効果が有るか無いかは別にして、行っておいて損はないだろうか
らね」

実際ある程度効果を上げており、すでに大和国内のいくつかの国人

衆達と何らかの密約を交わすことに成功している。これも久秀の手腕の賜物だろう。

「このまま上手くいけばよいですね」

そんな長逸の言葉に同意するのであった。

第二話 弾正

信貴山城は改装途中であり、防御拠点としての能力水準は低い、そのため三好勢は戦評定にて、受け身ではなく積極的な攻勢を行う事を決定する。

永禄2年6月下旬、義興は信貴山城より9500の兵を連れて出陣する。義興が阿波衆を久秀が大和衆を長逸が摂津衆をそれぞれ率いている。

義興は、興福寺に対して先手を打つため、平群群にて勢力を誇っている筒井家家臣、島氏の居城である椿井城へと兵を進める。三好勢からすれば、大和国の中心部へとつながる道を抑える位置に勢力を張る島氏は目の上のたん瘤であり、この島氏を降してしまえば、興福寺衆徒の中でも最大勢力であり、興福寺勢の主力を担っている筒井家の居城である筒井城へと一本道となる。また、筒井城は大和盆地の中心地点にあり、ここを占領すれば南北に敵の連絡線を分断することができ

る。兵を進める途中、従属を申し入れてきた平群郡の国人衆である龍田氏と合流し彼らの案内で、島氏の勢力圏へと兵を進める。

島氏の居城である椿井城を義興が本隊を率いて包囲し、同時に支城である西宮城を副大将松永久秀が、下垣内城を脇大将三好長逸が包囲を行う。

三好家が動いたという事はすぐにでも、興福寺の知るところとなるであろう。そうなれば、興福寺としても兵を派遣しないわけにはいかない。

「殿、松永殿、三好殿両名とも包囲が完了したとのことです。」

そう言って報告をしてきた男は、篠原孫四郎長房である。長房は義興の重臣であり、阿波を留守にすることが多い主君義興に代わって、普段は阿波国内にて能吏として三好義賢と共に阿波をまとめっており、此度の遠征に際し阿波より義興に従臣して近内へとやってきた。

「相、解った、助命するから降伏せよとの使者を」

「承知しました」

今回の椿井城攻めでは、後にやってくるであろう興福寺の援軍が来る前に攻略してしまうことが第一目標である。援軍が来てしまえば挟撃を避けるため陣を引き払い、再度引き直す必要があるためである。

使者を見送ったあと、長房へと話しかける。

「当たり前だが降伏勧告は、受け入れないだろうな」

島家の現当主である島清興は、主君である筒井順慶が幼くして家督を継いだ時より支えており、順慶からの信頼も厚く、本人の忠義心も高い。また、援軍の無い籠城戦は無謀であるが、今回は援軍の見込みが大きい。

「おそろくは」

長房が頷く。

「準備をしておいて損はないな、長房、付城の準備を」

付城を使って包囲を行い、久秀と長逸の合流を待ちつつ、敵の息切れを狙うのが義興の考えである。

「承知」

長房へと命を下し、長期戦に備えて付城の準備を行う。

基本戦略として、付城を使つての包囲となる。

島氏の領土は一万石程度でしかなく動員できる兵力も大して多くはないが、椿井城は山城であり、無理な力攻めは余計な犠牲を生むであろう。敵を侮るわけにはいかない、念入りに準備をしておいて損はない。

興福寺の本寺にて一人の僧が廊下を慌ただしく走り回っている。

「覚誉様、覚誉様」

「なんじゃ、騒々しい、静かにせんか」

そう咎めるのは、そろそろ還暦を迎える頃であろう男で、興福寺別当覚誉である。

「此方に居られましたか、覚誉様、それに筒井殿も」

覚誉と一緒に居るのは、金髪に透き通るような青い瞳をした女性で、名を筒井順慶という。この筒井順慶は、二歳にして筒井家の家督を継

いで以来その優れた政治感覚で筒井家を大和国内の国人衆として最大勢力へと押し上げた人物である。

そんな順慶が慌てる僧へと問いかける。

「その様に慌ててどうかされましたの」

その問いに対し僧が慌てたように言う。

「遂に三好が動きました、夜明けと共に一万近い軍勢を連れて信貴山城より出陣したとのことですよ」

「遂に三好連中が動きよったか……となると狙いは島か」

「おそろくは」

順慶が同意する。

「よし、順慶、すぐに他の者たちを評定の間へと集めよ」

「承知しましたわ、覚誉様」

会釈をし、順慶は他の者たちを集めるため去っていく。

興福寺としては、大和国内での求心力を維持するためにも、すぐにも来るであろう島家からの援軍願いに答えられないわけにはいかない。

また、島家の現当主である島清興は、順慶が幼少の頃より支えてくれた忠臣であり、友でもある、順慶としてはすぐにでも行動を開始したいところであろう。

（今代の公方様の性格を考えれば、今回の三好家の大和侵攻に何らかの形で首を突っ込んでいるのは間違いないだろう、確か、一乗院の門主は覚慶殿だったな……保険をかけといて損はないか）

覚誉はそう思考すると、報告に来た僧へと下知を下す。

そんな覚誉の下知に僧は驚いた様子であったが、自分を納得させるかのように命を受け取るのであった。

攻城の準備をしていると、島方へと出した使者が帰ってくる。

「やはり降伏は受け入れなかったか、となれば、まずは刈田だな」

刈田を行うため、後詰の部隊からいくらか兵を抽出すると刈田の部隊を編成させる。

刈田とは読んで字のごとく田んぼを刈ってしまうことである。この戦国の世においては、太い補給線を構築できる者はほぼ居らず、現

地での調達メインであった。そのため、刈田は重要な軍事行動の一つである。

三好家では、義興と久秀の主導の下に荷駄部隊の改革やインフラの整備など兵站線の強化などが行われ、その補給能力は他家に比べると、非常に高いが完璧とは言えない。また、刈田には食料調達意外にも敵に対する挑発の側面もあり、積極的に行っている。

刈田は、部隊ごとに計画的に行われる。好きにやらせてしまうと、略奪を行う部隊同士の衝突や喧嘩など要らぬことを招いてしまうためである。そのため三好家では、勝手に行った者には将兵問わず厳罰となる。

「集めた作物は、一度全て陣城まで持ってくるように」

刈田された作物は、一度集められその後再配布される。

義興としては、今回の刈田は、島方に対する挑発のつもりで行うつもりである。刈田は、武士の面子を潰すような行為であり、敵が激情にかられ城内から出て来てくれれば文句なしと言ったところである。

（しかし、相手は島左近、素直に出てきてくれるはずはないか）
そう思いながらも、刈田を行う部隊に下知を下すのであった。

三好方へと降った龍田家の者に案内され、久秀は西宮城の包囲を行う。久秀の包囲する西宮城は、曲輪と空堀でできた小さな丘城であるが、すぐ向かい側に建っている下垣内城とお互いを相互し合うように建っており見た目以上の防御力を誇っている。そのため下垣内城を包囲する長逸と連携し両城に連携させないようにすることが重要である。

「はあ、つまらないわね」

そう呟く主君久秀を見て正虎は、すこし憂鬱な気分になる。

主君久秀は、誰に対しても丁寧に接し、撫民を持って政務を行っており、民からの人気もあるが、時々見せる顔や、その黒さが恐ろしくもある。

「如何されました、殿」

その声に気づいた久秀が正虎の方を見る。

「何でもないわ、気にしないで、それよりも長逸殿の方はどうなの」
「既に準備は終わったとのことです」

「そう、なら義興様に使番を出しておきなさい」

「御意」

「さて、こんな小城さつさと落としちやいましよ、正虎」

久秀の号令を合図に陣太鼓と法螺貝が鳴らされる。

その音に合わせ将兵が、西宮城へと攻め寄せた。

仕寄りが行われ、垣楯や竹束を使い城との距離を詰めていく。

最初は鉄砲や弓の応酬から始まり、それは時間が経つにつて激しいものへとなっていく。

松永勢の攻めは激しく、投げつけられた焙烙玉が決して厚いとはいえない木の柵を叩き破り、そこから我こそは一番乗りとばかりに、次々と兵が侵入する。虎口では、破城槌を持った足軽が殺到し、城門を激しく叩きつける。

そんな様子を久秀はどこか嬉しそうに眺めていた。

「いいわ、楽しくなってきた」

そういつて笑う。

久秀の周りいる正虎以外の家臣達は、そんな久秀の顔を見ると、触らぬ神に祟りなしとばかりに久秀の周りから一歩離れた位置へと下がっていく。

結果的に正虎が一步前に出た形になる。

「ねえ、正虎、楽しいと思わない」

「あ、いえ、その」

いい淀み答えずらそうにしている正虎の顔を何処か嬉しそうに見る。

「彼らには万一にも勝ち目は無いわ、主家に義理堅く忠義を立てて奮闘する彼らを私達は虫けらのようにひき殺すのよ」

そんな主君に正虎は乾いた笑いしか返せないでいた。

久秀自身家臣達の困る姿を見るのが好きな一面がある。とはいえ、家臣達にきつく当たっている訳ではない。どちらかといえば、可能な限り家臣達の願いを聞き入れるなど主君としての器の大きさを見せ

ている。正虎の件がよい例である。

「まあいいわ」

ひとしきり正虎をからかう。

そんな久秀が、真横から入ってくるような光に不快に思いながら、その原因である空を見上げると、この地にやって来た時には真上にあった太陽はすでに落ちかけ、空をオレンジ色に染め上げていた。

「あら、もうこんな時間、仕方ないわね、正虎、撤収よ」

残念そうに言う。

久秀の命により、前線から徐々に部隊が撤収を始める。撤収と同時に夕食の準備が始まり、野営地の所々で湯気が上がる。

島方としては、厳しい1日となった。既に三の郭は、激しく損傷しており防御拠点としての能力は、かなり低下している。松永勢としても力攻めによる攻城の対価として自軍にも少なからず被害が出ているが、予想の範囲内であると言える。

久秀は、正虎からそう報告を受ける。

「なら、明日からは後詰め部隊も投入しなさい」

「よろしいのですか」

「問題ないわ、さっさと落とすとしてしまいましょ、それに、西宮城が落ちれば連鎖的に下垣内城も落ちるわ」

「確かに、西宮城を落としてしまえば、日向守様もやり易くなるでしょう」

明朝、雲一つ無い快晴、日が昇り切った頃より始まった攻勢は熾烈極めた。

まるで、押し寄せる津波のように。そんな攻勢が数日に渡って続く。

数日に渡って苛烈に押し寄せる松永勢によって、西宮城の三の郭と副郭はすでに陥落しており、残すは主郭だけとなっていた。

そこで、正虎が久秀に提案する。

「殿、残すは主郭だけです、城側に降伏を促しては」

城攻めにおいて、最後まで戦い本丸まで陥落するという事はあまり多くはない。基本的には、兵糧攻めや調略などによる攻略が多く、力

攻めにおいても二の丸や三の丸など城の一部が占領された時点で降伏をすることが多い。そのため正虎も降伏を久秀に提案したのである。

その提案に久秀も同意する。

「そうね、使者を出しなさい」

松永勢としてもこれ以上戦う意味は無いと言つてもよい。西宮城の落城は決定的であり、これ以上戦いを長引かせる必要は無いからである。

久秀としても早いとこ陣を引き払い、長逸や義興の元へいくべきであると考えている。しかし、使者の指示を出す久秀の顔は、遊び足りないと不満げそうにする童子のようであるが。

「城兵は助命、城主または城代に関しては、責任の処遇は義興様に一任するわ」

そう指示を出していく。

相手側との話し合いの後、正式に降伏が受諾されると、西宮城最後の砦である主郭の城門が開門される。

松永勢の攻勢を受けた西宮城は、至る所が激しい損傷を受けており、所々黒い煙をあげている。

じそんな西宮城の周りでは、兵達が戦後処理の一環として付城や陣城の解体を行っている。

その様子を眺めていた久秀に朗報が入る。

「三好日向守様よりご報告いたします、下垣内城が降伏いたしました」

「そう、解ったわ、下がって結構よ」

それは三好長逸よりもたらされた下垣内城降伏の知らせであった。

下垣内城は、西宮城が降伏した後も暫くの間抵抗を続けていたが、程なくして長逸へと降伏の使者を立てている。

西宮城も落ちた、下垣内城も落ちた、残るは樺井城だけだ、これを陥落させれば平群郡で三好家に敵対する勢力はいなくなる。大和戦における橋頭堡は盤石なものとなるだろう。

(予定より早く義興様と合流できそうね)

順調に事が進み久秀は思わず笑みがこぼれる。

戦後処理を終えた久秀と長逸は、ある程度の兵を両城に残し、残りの兵を連れて平群神社にて合流する。計6000の兵が平群神社に集まる。集まった6000の中には、龍田の者も見られる。

合流した頃には、すでに日が暮れ、至る所でコガタコウロギの鳴き声が響いている。

合流した二人は、平群神社の一室を借り、一晩そこで過ごしたのち総大将三好義興が包囲する椿井城へと向かうのであった。

第三話 左近

椿井城——椿井氏によって築城され、歴代の嶋氏当主によって改修が繰り返されてきた。その姿は、雄大豪荘にて平群郡一の城と言っても過言ではない。

そんな椿井城であったが、三好方より数日間にあつて定期的な攻勢が続いていた。600丁もの鉄砲が、椿井城へと向けられている。垣楯や木の壁を突き破って鉄砲の弾が飛び込んでくる。島方の城兵の死傷者は日に日に増えていった。しかし、このまま手をこまねいている訳にもいかず、竹束を狙った火矢による火責めが行われたが、泥が練りこまれた竹束により思うような戦果を上げられないでいた。

その様子を見ていた義興がつぶやく。

「やはり鉄砲の制圧力は凄まじいな」

そのつぶやきを長房が拾う。

「野戦ではともかく、攻城においても高い効果を発揮しますね」

「姉上に無理を言つて用意した甲斐があつたよ」

三好家は、今回の遠征に大量の鉄砲を導入している。鉄砲は、種子島に伝来して以来、全国に爆発的に広まっており、堺ではすでに部品交換方式による大量生産が始まっている。堺を影響下に置く三好家は、これを相場よりも安くかつ大量に買い入れて運用を行つており、義興はその鉄砲を、姉、長慶に頼み込み大量に持ち込んでいる。

また、義興は鉄砲を効果的に運用すべく、従来ならば組や隊としてそれぞれの備えの下に組み込まれて、バラバラに運用される事が多い鉄砲を、すべて一まとめにし、鉄砲衆として他の備えから独立した形で集中的な運用を行っている。

「鼻屑にしていた博多商人がいち早く情報を持ってきてくれて助かつたよ」

南蛮の武器を国産化したらしいという話を、博多商人から堺で聞いたときすぐにでも飛びついた、室町時代後半から江戸時代前半における鉄砲の占めた役割や重要性は十分理解していたし、これに飛びつかない手はないだろう。

そのかいあつてか、近内において三好家は他家に先んじて鉄砲の大量保有を実現している。

「よし、よし」

予想通りの効果を發揮する鉄砲に思わずニヤついてしまう。

そんな義興の姿を見ていた、長房が不意に朝に行われた評定の内容を思い出し、義興へと問いかける。

「殿、そういえば、弾正少弼様と日向守様は、西宮と下垣内を落城せしめたそうですね」

「ああ、そうみたいだ、一両日中には、合流できるとの早馬も今朝届いていたよ」

「それは、よきことですね、しかし、随分と早かったですね」

「時間には余裕があるから、焦る必要はないと、久秀には言ったんだがな、どうも苛烈に攻めたてたらしい」

「それは、弾正少弼様らしくはありませんね」

「まあ、なにか久秀にも思う所があるのだろうか」

「ええ、その様ですね」

長房が同意する。

長房との会話の後も幾らかのとき、三好と島の小競り合いは続くが、戦況を見守っていた義興が、退きの下知を下す。

「よし、今日は此処までとしよう、長房、退きだ」

「承知しました」

義興の下知により、前線の将兵たちが退いてくる。三好方の今日の攻勢は、これで終わりである。あとは、夜駆けに注意しつつ翌日に向け英気を養うのみである。

今日も三好方は、長く戦う事はなかった。

日も沈み、皆が寝静まった夜、地元の有力者の屋敷の一室を借り、寝泊りしている義興は、一通の文に目を通していた。それは、岩成友通が出した物であり、柳生と無事合流することが出来た、すぐにでも準備に取り掛かる、という内容である。

義興は以前より、久秀と共に大和国人衆に対して手紙のやり取りを

行うなど積極的に工作を行っている。ここでまた一つ実を結んだと言ったところだろう。これらに関する細かい調整は、久秀が行っており、これも彼女の手腕によるところが大きい。

一通り目を通すと、友通への返答を書き始める。

(龍田や柳生をはじめ大和の国人衆の幾つかは既に確約をへた、三好は彼らを牽いて興福寺と大和盆地の北部から中部を賭けて戦う事になるであろう、さすれば次は……)

「誰かある」

義興の声を聴き部屋の外に待機していた近習が返答する。

「如何なされました」

「大和の絵図を持ってきてくれ」

「はっ」

暫くすると部屋へと絵図を持った近習が入ってくる。

近習から絵図を受け取ると床に広げ、絵図に描かれている大和盆地を上から下へと指でなぞるように見る。上から下へと見る義興の目に二つの城が入ってくる。龍王山城、その南西にある十市城である。

この辺り一帯は、大和四家の一つに数えられる有力国人衆、十市氏が勢力を張っている。ここは、大和盆地南部の要といえよう。

その十市家であるが、大和各地に送った密偵達の情報では、十市家家中は荒れていることが分かっている。

十市家は、現当主である十市遠勝の父である十市遠忠の代より、大和有力国人衆である筒井家と折り合いが悪かったが、興福寺より幕府経由で仲裁が入り一時は和していた。しかし、遠忠が死去し遠勝が若くして当主となると、関係は再度こじれ少くない数の小競り合いが起きていた。現状は、三好という敵に対し表面上は興福寺の下で纏まってはいるが、家中では三好を利用し筒井に対抗すべきという意見が、無視できないものとなっており、三好派と興福寺派の対立が目立つようになってきている。

義興は、一枚の紙を取り出し筆を執る。久秀に宛てたものである。

ここで十市と接触することが出来れば、大きなアドバンテージを得ることが出来る。大和四家と言うが実質的には、筒井と十市の二強

であり、この二家の関係は良いとは言えない。

たとえ上手く行かなかつたとしても、此方から嘘八百を流してやればよい。出鱈目だと切り捨てるであろうが、やらないよりはましである。それに、嘘も百回言えば、それは真実となろう。

書き上げた二通の文を部屋の外にいる近習へと渡す。

「これを友通に、もう一方を久秀に渡してくれ」

文を受け取った近習が、駆け足気味に廊下の奥へと消えていく。

近習を見送ると、なんとも抗いがたい眠気が義興を襲う。夜着を着込んだ義興が眠りにつくのには長い時間はかからなかった。

「くそつたれ」

清興の心情は、そう言わずにはいられないものであった。自身の籠る椿井城は、三好方に包囲されて既に数日、日に日に増えていく死傷者と打開出来ぬ戦況に憤りを覚えていた。城門より打って出ようにも三好方は、正面から激突することを良しとせず、此方を受け流すように立ち回り、兵の多さを活かし此方の首を少しずつ絞めてくる。

しかし、だ、冷静に考えてみれば無理をして三好と当る必要は無い、興福寺の後詰が来るまで持ちこたえればよいのだ、敵にやる気が無いのならば付やってやる必要はない。だが、圧倒的に兵力で勝る三好が、なぜわざわざ時間をかけるような戦いをするのだろうか。一息に押しつぶしてしまったほうが良いのではないだろうか。興福寺の後詰が来ることぐらい百も承知はず。

そう考え込んでいた清興を、床を強く叩きつける音が現実へと引き戻す。

「おのれ、三好の連中め、黒土が出るほど掘り返しよって、今すぐにも打って出て冥土へ送ってくれようぞ」

床を叩きつけ、顔を赤くした家臣の一人が、興奮した様子で怒りを露にしている。

城からは、周囲の田畑が黒土が見えるほど掘り返されているのが見える。

「まあまあ、落ち着いて下され、これは敵の挑発ですよ、笑止とでも

送り返してやりましょう」

他の家臣がなだめるように言う。

「そんな事は百も承知、しかしだな、鉄砲で遠くから撃つだけの臆病者に、コケにされるのは腹正しいわ」

「さよう、さよう」

騒々しく騒ぐ家臣達を見て清興は頭痛を覚え、頭痛を少しでも和らげようとこめかみを軽く揉みながら家臣達を見る。

(家中の統率も主君の役目、ここらで引き締めねばならないな……。)

「騒がしいぞ、お前達、その辺にしておけ」

主君の怒気を含んだ声を聴き、潮が引くように家中が静まり返る。評定の間に集まった家臣達の視線が清興へと集まる。

「敵の狙いは、兵力差を生かして此方を息切れさせることだ、無理に付き合つてやる必要はない、城門から打つて出るなど敵の思う壺だ、私達のすべきことは、興福寺の後詰が来るまで持ちこたえること、ここでの屈辱は後詰決戦まで取つておけい、よいな」

大和に鬼左近ありと言われた主君清興の有無を言わさぬ迫力に皆圧倒される。

清興が評定の間の家臣達をぐるりと見渡すと、僅かな間を置いた後、皆平服する。

「はっ」

清興はそんな家臣達の姿を見ると、肩から荷が下りたように少し楽になる。家中の統率も楽じゃない、家臣達に舐められる訳にはいかないが、締め付けすぎるといけない、家中のバランスを取りつつ家臣団を団結させなければならぬ。しかし、この大和には、その根本に興福寺が大きく影響しており、興福寺にその忠義を向ける者も配下には多くいる。一向一揆のそれのように義ではなく、自らの信仰に従う者も少なくないのである。

そこまで考えたところで清興は、周りの者も気づかぬほどの小さな無音の溜息をついていることに気付く。

「はあ……」

清興自身それを否定することはできないでいた。自身の忠義は、主君順慶に向けられているが、自身も幼き頃から興福寺が傍にあつたのは確かであり、他の者の気持ちも解らないわけではない。

この戦乱の世において、自身の誇りと信念を守るため信仰へと抱きつくことは、少なくないのである。

その後も評定にて、今後の方針について細かな調整を話し合っていると、清興の近習が、評定の間に入って来る。近習が入ってきたためか評定の間は、息を潜めたかのように静かになる。近習は清興の傍によると耳打ちをする。

近習からの報告は、清興を落胆させるには十分なものであった。それは、落城の報であった。

西宮城および下垣内城の落城、その報が清興の頭で何度も繰り返される。

西宮城、下垣内城、この二城の城代は古くから島家へと仕える家系であり、島家の重臣でもある。若くして家督を継いだ自分を、支えてくれた彼らに何もしてやれぬ自分の不甲斐なさが恨めしく思える。

清興とて頭ではわかっている。数少ない兵で籠る二城で、三好の大軍を支えきるのは無理があると、落城は免れぬであろうと。

ここまで来て、清興は頭を切り替える。

この報皆に言わねばならない。ここで言えば、城の士気は更に下がるだろう。しかし、何れは露見するのだ、早いに越したことはない。

此方を見、主君の言葉を今か今かと待つ家臣達に清興は言う。

「西宮と下垣内が落城した」

清興の言葉を聞き評定の間が俄かに騒めきだす。

「と、殿、それは誠ですか」

「ああ」

「なんと……」

「まあ、そう悲観するな、少ない兵でよく粘ってくれた、二城が作つた時間を無駄にしてはならん、それに、別当様から出立の準備が整つたとの文も来ている、興福寺からこの椿井まで、二日程の距離だ、じきに後詰が来る、もうひと踏ん張りだ」

それを聞いた家臣達は喜色を浮かべる。

しかし、清興は素直に喜べないでいた。

興福寺が出立したとなれば、すぐにでも三好の耳に入るであろう。興福寺の本寺と椿井までは、行軍で二日の距離にある。挟撃されぬよう焦った敵が、無理攻めをしないと限らない。被害を気にせず力押しされたらこの椿井はどれ程持つであろうか。だが、敵は此方を破つたとしても、興福寺本体との鬪いが待っている。それに、敵の大將は、三好義興だと言う、彼は三好家が近内に上陸して以来、姉と共に各地を転戦したという。また、副将には、松永久秀が付いているとのこと。無理のある戦は、しないであろう。

(どう出るであろうか、ああ、解らぬ、解らぬなあ)

第四話 主税

大和国、添上郡、柳生郷、ここ柳生の里は、菅原一門を自称する国人衆である柳生氏によって治められている。大和盆地から見て北東に位置し、大和の国中である大和盆地からは、少し距離を置いた位置にある。

僅かな盆地を縫うように開拓された田んぼの水面が、昼間の陽をうけて白く光っている。

そんな景色を背に、柳生城の建てられた小高い山の麓にある、屋敷の敷地内へと入っていく一団がいる。

「はあ……つかれましたあ〜」

先頭を馬に乗って歩いている一人の女性が、どこか気の抜けるような声で疲れを訴える。

腰まで伸びた茶髪に、どこかあどけなさを残した顔の女性で、名を岩成友通という。元々は長慶の奉行衆として仕えていたが、段々と頭角を現していき、三好家中枢までのしあがった実力者でもある。

そんな彼女を迎えるのは、還暦を迎えようかという、大柄の男性で、柳生家現当主である柳生家蔵である。

「おお、これはこれは、岩成殿、遠いところよくぞまいられた」

「柳生殿、今日からよろしくお願い致しますう……」

「なんの、こちらこそよろしくお願いいたしもうす」

「はい〜」

そう返す友通。

友通が童顔なこともあってか、二人は祖父と孫娘のようである。

「立ち話もなんですしな、岩成殿、屋敷へ案内しますぞ」

そう言っつて屋敷の中へと入っていく家蔵の後を、友通がパタパタとついていく。

家蔵に案内され屋敷の中に割り振られた部屋で一息つく。その後、謁見の間にて家蔵と議するため、迎えの者が部屋へと来る。

友通は僅かな供回りをつれ謁見の間へと向かう。謁見の間には既に家蔵およびその家臣団が集まっていた。

友通が腰を下ろすと、家蔵がタイミングを見計らって口を開く。

「改めていたし申す、此度はよう参られた、岩成殿」

「はい……柳生殿」

お互いに軽い挨拶をしたところで本題へと入る。

「柳生殿……これをお受け取りください……」

そう言つて友通が一通の文を懐からだす。その文には、柳生の従属を認めること、添上郡の総代として認めること、添上の一郡を柳生の領地として認めること、などが書かれている。

「御屋形様と義興様の花押もしっかりとおされています……」

取り出した起請文を家蔵へと差し出す。

家蔵は文を受け取ると、文を上から下へと舐めるように見る。一通り目を通すと、友通へと問う。

「花押が押してある、ということは、これは確約していただけるのですな」

「はい……勿論です……」

「それは有難い、皆の者、御屋形様と義興様が、我ら柳生を添上郡の総代とし添上郡の支配を確約してくださるそうだ」

家蔵の言葉を聴き部屋が沸き立つ。

柳生は三好への従属に対し、添上郡、一郡という約束ではあったが、柳生の者の多くは半信半疑であったり、なにか裏があるのではないかと考えていたが、これで確約された形となる。

柳生家は添上郡の最大国人であり、大和北東部にて権勢を誇っていたが、筒井家と対立し順慶の父、順昭の代に戦に負け、その支配下にはいつている。そのため、全盛期に比べて領地は半分程度まで落ち込んでいる。しかし、今回三好が確約した添上郡、この一郡は柳生としてはかなりの躍進となる。失ってしまった領地の回復のみならず全盛期以上の領地を手にすることになる。勿論三好が勝った暁には、という条件付きではあるが、そんなことは承知の上である。これで三好が負けてしまったなら、それは柳生に時勢を読む力が無かったという事だ。

「領土安寧のみならず、加増まであるとは、まこと有難いことだ」

三好が柳生を想像以上に高くかっている事に、家敵は喜びを感じる。本来ならば、自ら高くかっでもらうよう交渉するのだが。うれしい誤算である。

三好が柳生に離反を持ちかけた際当初家敵は、この離反に対して消極的であった。筒井からの突然の侵攻により領地の半分を失ってしまったが、10年以上に渡って仕えてきた事には変わりはなく、義を示さずにて良いのであろうか、と考えていたが、他の有力国人衆に比べ、興福寺の影響が少なかったことも手伝って、息子宗敵の説得により離反を決めている。

小さな国人が生き残るには、時の勝者を見極め、強大なものに付くことが重要である。小さな国人たちは、自身の領地と家を守ることに精一杯であり、これが彼らの世渡り術なのである。

「我ら柳生、これからは三好と共にあろうぞ」

家敵が力強く言う。

「それは心強いですう……」

友通の答えに満足そうに家敵がうなづく。

「うむ」

うなずいた家敵を見た後、友通はもう一つの本題を切り出す。

「さっそくですがあ……兼ねてよりお話ししていた事ですがあ……」

「我らでよければ、いくらでもお手伝いいたす」

「それは良かったですう……では、こちらを見ていただきたいのですがあ……」

そう言うとい回りを持たせていた絵図を受けとり、自信と家敵の間に広げる。

「柳生殿にはここを、ついでにいただきたいのですう……」

友通が指したのは、興福寺の本寺がある山辺郡をはじめ興福寺の中樞が集まる場所である。

「後方のかく乱という事か、王道だが手堅い、誰しも縄張りを荒らされては、気が気ではなからうて」

家敵はさして驚く様子もない、興福寺の後ろに勢力を張る柳生に声

をかけたきた時点で察しはついている。

「これについては承知したが、倅の新介が幾らか手勢を率いて筒井の所に従軍しておる」

今回の子福治の招集にあたり、主家である筒井より柳生にも声はかかっており、家敵の嫡男である、柳生新介宗敵が従軍している。筒井より声がかかった時点ですでに三好との繋がりを持っていたため、家敵自身は高齢からくる体調不良とし、柳生郷に残っている。この段階での従軍拒否は難しいためである。

「それについては……お任せください……義興様にはすぐにでも伝えますう……新介殿に関しても、興福寺に送り込んでいる者達に伝えさせますう……」

「それは、有難い、頼めるか」

「任せられましたあゝ」

早朝、椿井の山から見える人の数は、今までとは比べ物にならないほどの密度であった。

数にして9800騎、それは、分散されていた三好勢の兵力が集結したことへの裏付けでもある。

信貴山城を発した時の三好勢は、9500であったが途中で従属を申し出た国人や兼ねてより三好方に下っていた国人を吸収し今に至る。

その様子を椿井山の開けた場所から一人の姫武者である島清興が見下ろしていた。

その清興に後ろから近づいてきた男が声をかける。

「殿」

その声に清興が振り返る。

「源一郎か、どうした、この様なところに」

「どうしたとは、こちらの言葉ですよ」

「いや、なに、松永久秀と三好長逸が合流したとのこと、奴らの顔でも拝んでやろうかと思つてね」

そう言つて椿井の山から見える小さな平群平野に広がった三好の

軍勢を見る。

それにつられ、源一郎も見る。

そこには、三階菱に五つ釘抜のあしらわれた旗が小平野を埋め尽くさんばかりに広がっている。

清興の耳に唾を飲み込む音が、かすかに聞こえてくる。

「大軍ですね……」

源一郎がつぶやく。

「10000近いそうだ」

10000の軍勢に、この城はどれだけ対抗することが出来るであろうか。

そんな考えが清興の頭をよぎる。

自分で言うのもなんであるが、この椿井城は平群一の堅城と言っても過言ではない。しかし自分の目の前に広がるのは、小平野である平群平野に広がる三好の軍勢、覆しがたい兵力差があるのはだれも目でも見ても明らかであろう。むろん、戦となれば最後まで敵に出血を強いるつもりではあるが……。

ここで考えるのをやめる。自分らしくない後ろ向きな考えに嘆息する。

三好がこの城を無視することは決してないであろう。

城は存在するだけで一定数の効力を発揮する。軍勢は大軍になればなるほど大きな街道を通らざるを得ない、たとえ迂回したとしても、それは自軍の後方連絡線への圧迫に他ならないだけでなく、無視した結果後方を荒らされ、後ろから突かれては堪ったものではないであろう。

三好にとって信貴山城は、大和における心臓部と言える。その足元に広がるのは平群平野であり、平野を挟んで対面の山に築かれしは椿井城である。椿井城を抑えずして平群郡の平定は完了しない。自らの土台である平群を不安定なままにすることはない。

椿井の山から見下ろす清興の見た三好の大軍は、我らを飲み込まんとする大蛇のようであった。

日本において酒が、明確に登場するのは上代の時代になってからである。以来酒は、時代と共に進化をしていく。経済の発展と共に酒の価値が上がっていくと、民間の商人達によって作られるようになる。幕府からの沽酒の禁によって一時期規制されたものの、幕府の財政難や需要の高まりによって酒屋は全国へと広まり、いまでは地方それぞれの特色を持った地酒も作られている。なかでも、寺院で作られる酒は、僧坊酒と言われ品質の高いものが多く、ここ、大和では正暦寺によって作られる菩提泉が有名である。

娯楽が少ないせいであろうか、この時代に來てから酒を飲むことが、とても楽しみな事の一つになった気がする。

「義興様、今よろしいでしょうか」

部屋の外から久秀の声がかかる。

「久秀か、もちろん構わないよ」

そう言うのと久秀が、障子を開け部屋の中へと入ってくる。その後ろからは、正虎が付いてきており、その手には大きめのヒョウタンが握られている。

「義興様、いかがですか」

ヒョウタンと杯を三つ義興の前へと出す。

「酒か、良いな、一杯やろう」

「はい」

自分の持った杯と久秀の杯に酒を注いでいく。注がれた酒は透き通るような透明さをもった清酒であった。

「清酒か」

この時代の酒は白く濁ったようなものが多く、透き通った清酒はあまり多くは出回っていない。出回っていたとしても高額であることが多い。

「何かつまみになるものが欲しいな」

眩きに正虎が反応する。

「何か用意してきます」

「すまん」

正虎が部屋から退出していく。

正虎が奥へと消えていくのを確認した後、久秀へと問いかける。

「今回は激しく攻めたてたらしいな」

そう久秀に聞くと少しの沈黙の後答える。

「……義興様に早く会いたかった、では駄目ですか」

体をよせ、そう言う久秀の顔はほんのり赤い。酒のせいであろうか。

「……そうか」

返答に詰まる自分を見て久秀が満足そうに笑う。

その顔に少しムツとして、離れていこうとする久秀の腰に手を添え、抱き寄せるように強く引き寄せる。

「あつ、んっ……」

抱き寄せられた久秀が、艶めかしい声を上げ肩へと寄りかかってくる。

何をするんだといわんばかりに、ジトツとした抗議の目を向けてくるが、普段のすまし顔は崩れ、桃色に染まった頬と小柄な身長が相まって、普段からは想像のできないような愛らしさがある。

久秀をもたれかからせるような体制のまま、杯に注がれた酒をチビチビと仰ぐ。

二人で酒を仰ぐ部屋は、空き家のような物静かさだ。唯一聞こえてくるのは、外で鳴く虫の声のみ。

幾らかの刻が経った頃であろうか、廊下を歩く音が聞こえる。

正虎であろう。

久秀の体を離すと、少し名残惜しそうな顔をする。

「お待たせいたしました、義興様」

正虎が持ってきたのは、味噌に塩、梅干しなど、どれもこの時代ではポピュラーなつまみと言える。

味噌を箸ですくって頬張る。味噌の塩っ辛さを酒の甘さで流し込む。

「そう言えば久秀、占領下の今後の統治についてだが」

そう切り出す。

「ええ、解っております、坊主どもには銭を握らせておけば、問題な

いかと思います」

「そうだな、大和の寺院は興福寺の影響が強い、無理に押さえつけてもいらぬ反発を生むのは間違いないな」

「それでも露骨に反発する者がいれば、ある程度の見せしめは必要かと思えます」

無理な統治で一向一揆の二の舞は御免である。

「ある程度のけじめさえつけさせれば、それで問題ないか」

「はい」

ある程度纏まった所で話を切り上げる。

「よし、政の話はここまでにしようか、酒の席でこれ以上しても無粋だしな」

飲み直しとばかりに杯に注がれた酒を一気に飲み干す。

現代のお酒になれた自分には、アルコール度数の低いこの時代の酒は少々物足りなく感じるが、今では愛着も湧いてきている。

すかさず空になった杯に、正虎が酌をする。

もう夏が近いが、まだ夜は小寒い。

冷えた体を温めるように酒を仰ぐ。

三人でおこなわれた晩酌会は、夜中近くまで続いたのであった。